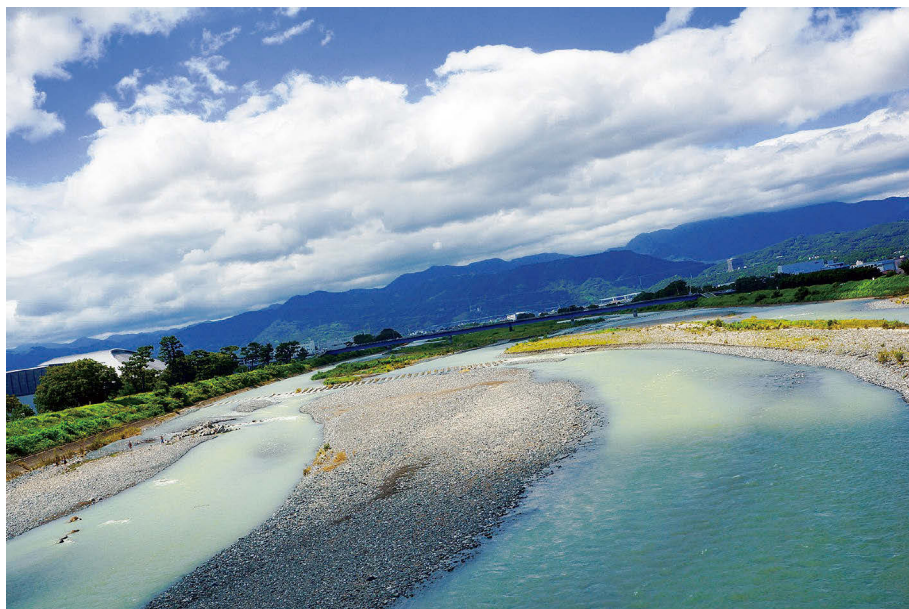


アートとケア

アール・ブリュットから受けるもの

7

アール・ブリュットとは、
美術教育を受けていない人々が創造する「^き生」の芸術。
心身に障害を持つ作家も少なくない。
あるがままの作家の内なる世界とのやりとりを迫る作品は、
私たちに何をもたらすだろうか。



「スカイブルース」
(2015年)

外にある者の声に希望を聞く

実践女子大学 教授（哲学・風土学）

犬塚潤一郎

アール・ブリュット作品の前に立つとき私たちは、自身の内なる“美”の秩序が揺すぶられるのを感じます。

芸術が追求する“美しさ”は、感性的であるよりは理知的なものであること。それは、西洋では芸術と哲学を同じものに向かう2つのやり方としてきたことにも表れます。アール・ブリュット作品は、そのような西洋的“美”における、“理性”という強力な秩序に闘争を挑んでもいます。

しかし実のところ、西洋の伝統的な、つまり古典的で近代的な美の精神はすでに危機に瀕^{ひん}して、秩序の多様・複数性を迎えているのですから、むしろそれは、“知”をより複雑なものとして再生する働きでもあるでしょう。

一方、私たち日本の風土で培われてきた精神は、そのような経緯とは縁遠いまま、作品を理念的に読み解こうという学習経験の機会すら稀^{まれ}でしかありません。好きか嫌いか、共感できるかどうか、つまりはウチに入れてあげるかソトのままかのような、“近しみ”の問題に置き換えられがちです。そこにはウチなる“優しさ”の成長を期待する面もありますが、身勝手な仲間扱いが排斥の態度の裏返しでしかないように、“私たち”の外からの声、つまり“他者”に対して、向き合うことをしないままなのかもしれません。

人間性の限界の暗澹^{あんたん}たる現実のうちに希望の言葉を語ろうとすることにこそ、想いを向けたいものです。

今月の作家

Sato-C

1983年生まれ／神奈川県

小田原在住の彼は、「ふだん自分が過ごしている街がどんなに素敵かを切り取ることが写真への想いであり自分の日常だ」と語っている。彼と写真との出会いは『地雷を踏んだらサヨウナラ』（若くして亡くなった報道写真家・一ノ瀬泰造の生涯を追った映画作品）を観たのがきっかけで、「写真は人との出会いを自分に与えてくれる」と一眼レフカメラを手話す。（解説：末安民生）

企画協力：NPO 法人キャンサーリボンズ
「サンクスナース」プロジェクト